

## 第5回語り場報告書

### はじめに

2022年3月22日(火)13:45~16:20に開催した「第5回語り場」の報告です。今回は、やや変則的なまとめ方をさせていただきました。前半部分のエシカルバンブー(株)の田澤恵津子社長さんについては、市原さんが速記メモとエシカルバンブー(株)さんのHPから(田澤社長さんのご了解を得た上で引用)、臨場感あふれるまとめを作成してくださいました。この市原さんのまとめに、私の方で気にな



ったことや追加の質問について、記載させていただくことにしました。後半の花柳寿寛福さんについては、花柳さんにいただいた資料を下に、インターネットからの情報で補足しながら東がまとめています。

お二人からは、とても素晴らしい、またとないお話を聞くことができました。その様子をご堪能ください。なお内容については、ご両人の校正を受けた上で報告させていただきます。

なお参加者は、会場が全員で14名、ZOOMによる参加が2名でした。

### エシカルバンブー(株)田澤社長さんが語る

まず初めに、エシカルバンブー(株)の田澤恵津子社長さんがお話してくださいました。以下の市原さんのまとめを中心にご覧ください。詳しい報告となっていますので、少々長くなります。ただその場にいたかのような感覚になること間違いなしです。

- ・田澤社長は東京生まれの東京育ち。お兄さんが障害者で、働く場が限られていることを当事者として経験され、働きにくい人が、働きやすい環境をつくることを志すキッカケとなった。
- ・大学進学を諦め、当時(高校卒業ということもあり、あまり企業を知らなかったため、母親の情報で三菱商事が1番大きな企業だと思っていた)日本一大きい会社であった三菱商事にダメもとで応募し合格。柔軟に、ラフに、前向きに物事が考えられるところが評価されたのかなど。
- ・その後33歳での独立を目標に事業を行う上で必要な知識を学びたいという気持ちで転職を重ねた。ソニー、ロレアル化粧品、博報堂、ジョンソンエンドジョンソン等。
- ・その後、博報堂時代のクライアントであった東京電力から「伐採した大量の竹を活用する方法を考えて」という相談が持ち込まれる。これが、田澤さんと竹との運命

の出会いだった。

- ・竹は成長が速く、送電線にからむと停電の原因となってしまう。ほぼ毎日伐採する必要があるが、それが膨大な量になる。「マーケティング的な考え方をする時には、マイナスをプラスに、ピンチをチャンスに変えることが重要。肥料はいらす管理したりする必要もなく、成長が早いということは、資源として最高。計画的に活用すれば、非常にサステナブル。しかも、抗菌効果、消臭効果という機能性も高い。最強に魅力的な素材である」と。
- ・相談を受けた田澤さんは、タオルに活用することを考えるが、竹を繊維に加工してくれる工場が国内になかった。「こういう時の私は、『ないからあきらめる』ではなく、『1%でも可能性があるならやってみよう』と考える。国内で工場を設立することも考えたが当時の調査で数千億の費用が繊維工場を設立する上でかかるということがわかったため、まずは試験的に国産竹の繊維化を進めてみようという気持ちで始める。国内にないなら海外で探すしかない。求めている工場が中国にあった。」
- ・安全基準や環境基準を守り、品質を維持できる工場はあるのか。中国各地 35 カ所もの工場を見て回り、条件に合う良心的な工場を見つけることができた。
- ・2010 年、念願の竹のタオルの販売がスタートした。しかし、2011 年 3 月に東日本大震災が起こり、電力会社側は新規事業をストップした。「既に動き出している事業を止めるわけにはいかない。ここまで協力してくれた人たちをがっかりさせたくない」という思いから、竹タオルの事業を自分で進めようと考えた。中国の工場側が「田澤さんがやるなら続ける」と言ってくれたこともあり、田澤さんは正式に竹のタオルの事業を継承することになった。
- ・そんな折、消費者からこんな声が届いた。「子どもが竹のタオルを気に入って、気が付けば口に入れていています。ただ、洗剤も口に入っていると思うと怖いので、口にいられても安全な洗剤があったら是非セットで販売してもらえないでしょうか」と。
- ・そこで田澤さんは、条件に合うような洗剤を全国探したが、天然素材由来とされる洗剤でも必ずと言っていいほど界面活性剤が入っていることがわかった。さらに探すうち、いくつかの会社から、原料が竹炭と湧き水だけの「竹の洗剤」が出ていることを知る。
- ・「販売元に問い合わせると、皆さん、同じ会社から原液を買っていると言うんです。そこで行き着いたのが、山口県防府市の会社でした」。
- ・「竹の洗剤」を作る会社を訪ねて、生まれて初めて山口県を訪れた田澤さんは、そこで運命の出会いを果たす。1975 年からその地で炭焼きをスタートし、2003 年に竹炭と湧き水で作った洗剤原液、竹ミネラルを全国で初めて開発・販売した伊藤緑地建設だった。
- ・田澤さんは当初、OEM（他社ブランドの製品を製造すること（Wikipedia より））で



竹のタオル

製造を委託し、竹タオルとセットで販売しようと考えていたという。ところが、80歳前後のおじいちゃんやおばあちゃんたちが中心となっている会社で、「自分たちはもうトシだから、自分たちだけでは事業を続けていくことができない。こんなにすばらしいタオルを竹で作ったあんに、この事業を継いでほしい」と。

- 2015年、田澤さんは伊藤緑地建設から正式に竹ミネラル製造業務を事業継承した。事業承継の際に親族とのトラブル等も起こることを聞いていたので、事業を伊藤緑地建設から購入することにした。この竹ミネラルを商品化したのが、現在の主力商品である洗剤「バンブークリア」だ。
- 竹ミネラルの原料となる竹炭を製造していた人の多くは高齢者で、「お金が欲しいわけじゃない」「自由に働きたい」という強い希望があった。このため、社員として雇用するのではなく、彼らと一緒に竹炭を作り、その分を会社が買い上げる形にした。そのスタイルもユニークだ。竹ミネラルによる収入は「炭窯貯金」として貯めておき、ある程度まとまった金額になったら、おじいちゃんたちがみんなでおいしいものを食べに行ったり、旅行に行ったりするのに使っているという。実際に2019年にはみんなで沖縄旅行にいった。
- コロナ禍までは、山口と東京を言ったり来たりする生活だったが、今は軸足を山口に置いている。「最初のうちは本当に大変で、いつもぐったりしていました。山口から東京に戻ると声が出なくなってるんです。『何とか自分の思いをおじいちゃんに伝えたい』と大きな声で一生懸命説明するので、毎回声が枯れていました。」
- 2016年にはエシカルバンブー(株)を設立し、小さな製造工場を建設。約2年をかけて製造ラインを整備し、2018年からバンブークリアを本格的に製造・販売し始めた。
- 宣伝広告費を一切かけず、徹底的に販路にこだわった。バンブークリアは、1リットル入りで1,650円(税込み)と、一般的な合成洗剤に比べれば高く、ドラッグストアなどでの価格競争では勝負できない。しかし、希釈すれば掃除用洗剤や入浴剤としても使えるほか、少量で効果があるので洗濯1回あたりのコストは一般の洗剤の約半額で済む。そこで、ブランディングを重視し、売り先を厳選。都内のオーガニックに力をいれている店舗や産婦人科、助産院、美容院、薬局、皮膚科、国立公園の売店、クリーニング店などに絞った。
- そんなバンブークリアが広がったきっかけは、2018年夏に広島を襲った豪雨だった。「広島の豪雨の時、市内の下水管がいくつも破裂したんですね。その時、業者と一緒に中を見た主婦の方が、管の内部にこびりついているどろどろの柔軟剤の成分を見てびっくりしたそうなんです」。そこで、高い洗浄力を持ちながらも化学物質を全く使用していない洗剤はないものかと探すうちに、湧き水と竹炭だけからできているバンブークリアにたどり着き、口コミで注文が広がった。
- さらに2019年の千葉県の豪雨では、停電が長引き、洗濯機が使えず困った人の間でバンブークリアの評判になった。「夏なので大人も子どもも汗をかいて、汚れやにおいで困っていたそうです。バンブークリアは泡が出ないので、たらいに入れてつけ置き洗いをし、すすがずそのまま干しても大丈夫だということで人気が出まし



バンブークリア

た。これは災害時の特殊な例なので、すすぎができる環境では、汚れをしっかりとすためにも1回すすぎをしてほしいのですが。」

- ・「汚れがよく落ちるし、背景にあるストーリーがおもしろい」と、都内の高級スーパーなどからの引き合いが増えているほか、パリコレに商品を提供しているような有名ブランドなどからのコラボレーションの相談も相次いでいる。
- ・メディアで取り上げられることも増えた。忙しい田澤さんだが、できるだけ取材を受けるようにしているという。
- ・「おじいちゃんたちには、自分たちが作った商品がどんなふうに市場に受け入れられているかが伝わりにくいんです。メディアに出ると、それがわかるので、雑誌やテレビに出ると、すごく喜んでくれるんですよ」
- ・ただ、高齢者と働いていると、ふいに別れが訪れることもある。「今年の3月には、創業時から応援してくれていたおじいちゃんが亡くなったんです。いつどこで何が起こるか分からない。そんな時にいつも『時間がないな』と感じます。高齢者と仕事をするものの、悲しいところでもあります。だからこそ、彼らに喜んでもらえるような成果を残していきたいんです。」
- ・竹ミネラルを作る窯を「聖域」と呼ぶ田澤さん。「化学物質を持ち込みたくない」と、働く人には香水や柔軟剤の使用もやめるようお願いしている。
- ・大事に作った製品の人気が高まってくるのはうれしいが、「正直、ものすごく利益があがる商品ではない」という。「日本酒づくりのように、人の手だけで作るので工程も多い。このまま需要が増えれば、工程を簡略化して大量生産するような競合他社が出てきて、いつか厳しくなるんじゃないかと思っています。でも、一過性のブームで終わらせるつもりはありません。」
- ・そこで田澤さんがスタートさせたのが、竹の葉から根まですべてを利用できる繊維工場建設プロジェクトだ。
- ・「竹の全ての部位はもちろん、繊維を作る上で出た排水もすべて商品化します。排水といっても、竹と湧き水しか入っていないので飲めるぐらい安全ですし、研究機関に送ったところ、抗菌や抗酸化作用があることも分かりました。これは、化粧品に利用できます。新しい工場ではゴミも出ませんし、排熱も次の商品を作る時に使うのでエネルギーの無駄もありません。7月末には、世界的にも類をみない工場が完成します。」
- ・工場の周辺は自然が豊かで、近くを流れる川にはコイやアユ、スッポンもいる。「私は資源を使うことを目的とするのではなく、残すことを追求した産業を興したいと考えています。資源を取りつくさず未来のために残すという考え方です。過去に産業を興してきた人の中には、そういった考え方の人物が多かったように思いますし、私もそうありたいと思っています。ですから、『起業家』ではなく、『産業家』と呼ばれたいんです。そして“竹害”ではなく、“竹財”と呼ばれるような有益な資源として、竹を未来に繋いでいきたいです」



バンブーミスト

以上のようにまとめられた上で、市原さんは次のように締めくくられました。

田澤社長が約1時間にわたって熱弁されたことを全て記録することが難しかったので、社長の許可をいただいてエシカルバンブー(株)のホームページからの記事を抜粋しながら社長のお話の補足をしたものです。社長の話は迫力があり、バイタリティーの塊のような、それでいて一本筋が通った心が熱い方です。「笑働笑進」を社是とされているようですが、この度、縁あって「徳地に炭窯が作れるところはないですか」の問合せをいただき、候補地を探した結果、島地山畑の出雲ファームさんの工場の入り口にあたる場所に適地が見つかり、所有者さんに交渉したところ承諾を頂きました。「炭を焼くところはエシカル社員で行いますが、その前後工程の作業や、竹材の供給等は地元の方々にご協力をいただきたく考えています」と熱く語られました。

エシカルさんが徳地の地で永続的に事業を継続され、ますます発展されるよう地元働きかけ協力をお願いする等微力を注ぎたいと考えています。

以上の市原さんのまとめを受けて、田澤社長さんのお話の中で、東の方で気になったことを列記します。

- ・「人ができないがチャンス」こんな発想ができるからこそ、エシカルバンブー(株)さんのそれぞれの製品が誕生したのだと思います。なかなかできない発想です。
- ・竹の繁茂状況や竹の種類が確認できるマップ化した「竹林マップ」や資源量の計算式なども存在していたことも、山口県で竹の事業に取り組むことにした要因だともおっしゃっていました。そういえば山口県では、「やまぐち森林づくり県民税」を活用して「繁茂竹林整備事業」を実施しています。
- ・中国でのタオル製造を依頼できる工場を見つけ出すにも、大変なご尽力されたようです。どうにか安心・安全に製造できる工場に出会えたのですが、これで満足のいく製品化ができたかといえば、そう簡単ではなかったようです。品質の確保を図るためには、並大抵の努力ではなかったようです。今治市での研修を行ったり、田澤社長さんが自ら検品されたりしました。ところが次の日には、落とされた製品が元に戻されているのだそうです。そこでやむを得ず工場に泊まり込まれることとなります。さらにきちんとした製品を作れる社員には、時給を増やすなどの工夫もされました。このようにして、やっと品質の確保を図ることができたようです。社会で評価される結果を出すには、大変な努力が必要になるのだと、今更ながら思わせていただきました。
- ・働き方改革が声高に叫ばれています。それ以前に、エシカルバンブー(株)さんでは、働きにくい人が働きやすい環境をつくることに尽力されてきました。炭窯貯金については、市原さんのレポートに書かれていますので、そちらをご覧ください。短時間労働にも取り組まれています。実に週1時間労働の方もいらっしゃるのだそうです。お兄さんのこともあり、様々な障がい者への就労支援にもチャレンジされています。多くの経営者に見習ってほしいところです。
- ・それから竹の視点からの子供たちへの教育にも取り組まれています。この取組は「竹育」と表現されました。コロナ禍の中ではありますが、実に年間425回もこなされているというのです。竹の循環性を通じて、環境にできる限り負荷をかけない暮らし方について、一緒に考えておられるのだそうです。

- ・ 3つの商品をはじめ、バンブークリアと一般の洗剤で洗ったタオルを持参くださいました。触ったところバンブークリアの方が明らかにいい肌触りなのです。その上排水は、排水先の浄化にも貢献するのだそうです。もう「すごい！」といった言葉しか出てきません。

年度末のお忙しいことも考えずに語り場終了後にも、厚かましい私は、メールで追加の質問をさせていただきました。

**Q**：私が聞き逃したのだと思いますが、なぜ中国に乗り込んでまで、中国でのタオルの製造を追求されたのでしょうか。一般的には人件費を低く抑えるためということになりますが、田澤社長さんのお話から違うように感じました。竹からタオルを製造する技術があったからなのでしょうか。

**A**：17年前には竹から繊維に加工する工場が国内には存在しませんでした。工場をつくるという事も検討しましたが、竹の中にある成分の調査や日本竹から繊維を作る調査、そして竹を繊維にするための機材の製造などを調査したところ、国産竹の繊維工場をつくるのには莫大な費用がかかるころまでが調査で分かりました（当時の金額で数千億円とでました）。そのため、工場を国内に作る事を最終目的として、段階的に事業計画をたて、日本の竹で繊維ができるかの調査を開始したのが17年前です。

最初に中国で天然繊維の加工として竹を繊維化にしている工場を35カ所見つけたので、その工場を1社1社訪問し製造工程での環境負荷や工場での作業に関する安全基準などを確認しました（調査したところ99%違法な薬品で竹を溶かし竹繊維とは名ばかりの化学薬品まみれの繊維を製造していました）。色々と調査した中で1社専用契約を締結し、国内から国産竹を100トン中国の契約した工場に運び、日本の竹の繊維化にトライすることから始まりました。

人件費を安くする事などは全く考えておりませんでした。どちらかという弊社と契約してくれた工場には給与をアップする等して待遇面では日本と変わらない状態で契約しております。現在でも中国工場とは契約しており（エシカル専用の製造ラインがあるため）国内での製造と中国での製造の2ライン展開をしております。

私の仕事の進め方としてはロングゴール（国内に国産の竹繊維工場をつくる）を設けたら、そこに進むまでのショートゴールをいくつかの方向で設定し、品質面や製造面、そして安全面などを分析しながら進めていくやり方ですので、ある程度の品質が確保できるまで、既に天然竹での繊維化を進めていた中国工場での国産竹での繊維化をスタートした形となります（今現在も日本竹での繊維化及びタオルなどの製造は弊社のみです）。

今治タオルなども竹繊維という事をうたってはいますが、国産の竹ではなく海外の糸を10%のみ混合させているもので、綿90%・海外の竹繊維10%です。更にと日本竹を含有した繊維から糸までが完成したタオルの製造を依頼するために、今治タオルに糸を持って依頼にいきましたが、繊維が細く柔らかいので織機が合わないということで断られました。

①国産竹が環境に負荷をかけることなく繊維になるかの実証をする事。

- ②製品として品質を保てる耐久性や吸水性があることなどの調査をする事。
- ③国産竹 100%で繊維や糸が作れることの研究・開発を目的とする事。

上記の件がクリアになり、ある程度の立証がとれたので 2021 年の 6 月に宇部市に国産竹繊維工場を世界で初めて設立しました。

Q：日本の竹問題さらにはいけば里山の整備を進めるために、国内にエシカルバンブー(株)さんのような会社を何か所か配置すればいいように単純に考えるのですが、難しいことなのでしょうか。

A：東さんがおっしゃる通り、国内に弊社の F C 展開を進めていくために、現在は営業所を各地に設立し竹の調査や土地の調査を進めております。この 5 年以内に各地にエシカルの工場を設立していく方向で進めております。但し、展開方法を間違えると製品開発に関する情報漏洩などの知財関係の管理が難しくなるため、繊維への最終加工は山口の宇部工場で行い、途中工程までを各地の F C 工場にて行う流れも構築中です。

今は製品を作る事は時間とお金と人手があればできますが、最終的な製品を如何にブランディングして進めていくことが重要だと思っております。大量生産、大量消費ではなく、1 本 1 本の竹に付加価値を付け、製品をつくるために山や森に入るのではなく、山や森を整備することを目的に製品をつくる世界を構築し、全国に竹利活用の為のプラットフォームの構築を進めるためにも、現在、国と様々な規約の作成をしております。山口の竹のブランド価値を高め、“山口から世界に”を目標に邁進してまいりたいと思っておりますので引き続き宜しくお願いいたします。

私は、エシカルバンブー(株)さんのような地域の課題を解決し地域に貢献する会社が増えていけば、もっと暮らしやすくなるのではと考えています。簡単にできるものではないにしても、近江商人の三方よし(商売において売り手と買い手が満足するのは当然のこと、社会に貢献できてこそよい商売といえる(社より))を絵にかいたようなエシカルバンブー(株)さんがもっともっと増えてほしいと願っています。田澤社長さんの話を聞いて、一層エシカルバンブー(株)さんのファンになってしまいました。お忙しいところありがとうございました。

## 日本舞踊花柳流の花柳寿寛福さんが語る

次いで日本舞踊花柳流の花柳寿寛福さんは、「仁保での 15 年のご縁に感謝して」と題して、仁保地域での日本舞踊花柳流の稽古場「桜樹館」、コロナ禍での山口の魅力の発信、さらには櫛文化について話してくださいました。花柳寿寛福さんも、まず自己紹介から話始められました。

日本舞踊銀扇会に所属され、仁保地域に建設された稽古場「桜樹館」の支配人でもあります。また「櫛文化協会★」の副会長もされています。祖母(初代 花柳寿寛)の代から日本舞踊に関われ、湯田温泉を拠点に各地で日本舞踊の公演、創作、インバウンド事業等に取り組まれ



ています。また文化交流のため、スペイン ナバラ州パンプローナでのワークショップ・公演、ハビエル教会での奉納舞踊や韓国 釜山での日韓文化交流事業のために訪問もされてこられました。

★**櫨文化協会**(<http://hazebun.jp/>)は、「櫨を守り育み、心にあかりを灯す」を目標に、次の趣旨から、平成 28 年(2016 年)12 月 1 日に任意団体として発足しています。

毎年秋、鮮やかな紅葉をする櫨(はぜ)は、その実が和ろうそくや鬢付けの原料になることから、江戸時代より九州・西日本の各藩で盛んに奨励栽培されました。

しかし明治時代は 9 万トンあった櫨の実の生産量も現在では 100 トン足らず。櫨並木や櫨畑は数えるほどしかなく、各地の櫨の木は激減しています。

櫨は日本でしか栽培されていないため、櫨がなくなることは日本独自の文化のあかりの一つが消えることに他なりません。

櫨を守り育てることは人々の心を灯し、ほのかに照らし続けることでもあります。

このような状況から、私たちは日本各地にある櫨の生産活動の持続的な発展を促し、広葉樹である櫨を生かした地域の環境保全及び、伝統文化の継承に寄与するために、櫨を守り育む活動を行っています。(櫨文化協会のホームページより)

仁保地域との縁は、2007 年に稽古場「桜樹館」を建てられてからだそうです。仁保と関わることではじめたこと、かわったことは、里山・仁保の自然に触れ、観月会、観桜会、海外からのアーティストとコラボレーション(「ブルーグラス★と日本舞踊」)等を実施されたことだそうです。仁保地域に居ながらにして、世界を知る機会も多く恵まれたとのこと。これらの様子は、以下の新聞記事をご参照ください。

★**ブルーグラス**(Bluegrass music)は、アコースティック音楽のジャンル。アメリカのアパラチア南部に入植したスコッチ・アイリッシュの伝承音楽をベースにして 1945 年ごろ、ビル・モンロー のブルー・グラス・ボーイズにアール・スクラッグスが加わってから後に発展した。名称はこの地域に植生する牧草「Bluegrass」から来ている。(Wikipedia より)





## オンライン 市民総踊り 山口の日本舞踊銀屑会

新型コロナウイルス感染症の影響で山口の夏の風物詩、山口舞踊の市民総踊りが中止になったことを受け、同市の日本舞踊銀屑会は、ビデオ会議システム「Zoom（ズーム）」を活用したオンラインで総踊りを開催した。

例年、山口舞踊会の中目には市中心商店街で市民が「大内の殿様」を踊る。約40年前に同会の二代目花柳寿寛さんが初の振り付けを考へ、6、7月に参加者に踊りを指導してきた。花柳さんの長女、寿寛嬢

「新型コロナウイルスの影響で外出が難しくても楽しいことをしたい」「そんな思いから企画した」と山口在住の日本舞踊家、父は山口舞踊会を率える市民総踊りである大内の殿様の振り付けを作った寿寛さん。自身も幼い頃から日本舞踊に親しんだ。

2019年、宮教師フランチス・コ・サビエルの経度観内からスペインに向かった訪問団に参加。寿寛さん、スペイン組や英語圏の人らと一緒に踊り、心を通わせた。

「国が違っても踊りは誰でも楽しめるし、振り込められた思いも通じると」思った。

「ちょろんが抱える様子なども振り付けに含まれる大内の殿様。今度もオンラインでのおどろろろを、スペイン組や英語圏の人ら向けに開く予定だ。（立山芽衣）

「新たなコロナウイルスの影響で外出が難しくても楽しいことをしたい」「そんな思いから企画した」と山口在住の日本舞踊家、父は山口舞踊会を率える市民総踊りである大内の殿様の振り付けを作った寿寛さん。自身も幼い頃から日本舞踊に親しんだ。

2019年、宮教師フランチス・コ・サビエルの経度観内からスペインに向かった訪問団に参加。寿寛さん、スペイン組や英語圏の人らと一緒に踊り、心を通わせた。

「国が違っても踊りは誰でも楽しめるし、振り込められた思いも通じると」思った。

「ちょろんが抱える様子なども振り付けに含まれる大内の殿様。今度もオンラインでのおどろろろを、スペイン組や英語圏の人ら向けに開く予定だ。（立山芽衣）

「新たなコロナウイルスの影響で外出が難しくても楽しいことをしたい」「そんな思いから企画した」と山口在住の日本舞踊家、父は山口舞踊会を率える市民総踊りである大内の殿様の振り付けを作った寿寛さん。自身も幼い頃から日本舞踊に親しんだ。

2019年、宮教師フランチス・コ・サビエルの経度観内からスペインに向かった訪問団に参加。寿寛さん、スペイン組や英語圏の人らと一緒に踊り、心を通わせた。

「国が違っても踊りは誰でも楽しめるし、振り込められた思いも通じると」思った。

「ちょろんが抱える様子なども振り付けに含まれる大内の殿様。今度もオンラインでのおどろろろを、スペイン組や英語圏の人ら向けに開く予定だ。（立山芽衣）

## 総踊りで世界つなぐ

### ひと物語

花柳 寿寛福さん 65

オンラインで  
おどろろろを  
踊った

8月14、21日、山口市の市民総踊り「大内の殿様」をオンラインで楽しむイベントを開催。ウエア全編システム「Zoom」を使って手本を見せ、スペイン、メキシコなど国内外の計40組の人たちがそれを参考に画面を通じてともに踊り、心を通わせた。

「新たなコロナウイルスの影響で外出が難しくても楽しいことをしたい」「そんな思いから企画した」と山口在住の日本舞踊家、父は山口舞踊会を率える市民総踊りである大内の殿様の振り付けを作った寿寛さん。自身も幼い頃から日本舞踊に親しんだ。

2019年、宮教師フランチス・コ・サビエルの経度観内からスペインに向かった訪問団に参加。寿寛さん、スペイン組や英語圏の人らと一緒に踊り、心を通わせた。

「国が違っても踊りは誰でも楽しめるし、振り込められた思いも通じると」思った。

「ちょろんが抱える様子なども振り付けに含まれる大内の殿様。今度もオンラインでのおどろろろを、スペイン組や英語圏の人ら向けに開く予定だ。（立山芽衣）

コロナ禍の中、なかなか山口市の市民総踊り「大内の殿様」ができないことから、オンラインで楽しめるイベントを開催されました。スペインやメキシコをはじめ 35カ国以上、のべ1,000人以上の皆さんと交流し、山口の魅力を発信されました。上の新聞記事をご参照ください。

続いて檜文化について、お話くださいました。

自然光、和ろうそく等の光源で日本舞踊等の公演を行う中、原材料「檜」と出会うことになられます。檜がもたらす豊かさを分かち合い、檜の木を増やすために、各地で活動する個人や団体と「檜文化協会」を設立されました。この協会の活動の一環として、ワークショップ、公演、講演、フィールドワーク等を行ってこられたそうです。



日本における檜との共生関係は長く、平安時代には天皇以外の使用を禁じた絶対禁色「黄檜染」の染料として定められています。実からとれるロウは、現在でも和ろうそくのみならず、化粧品、医薬品、工業製品等さまざまに活用されているのだそうです。韓国では、健康増進のために食されてもいるようです。

山口県では江戸末期の1838年（天保9年）に、藩財政立て直しを任された長州藩家老の村田清風が、米、塩、和紙に檜蠟を加えた四つの白い産物を奨励する防長四白政策に取り組みます。これにより檜蠟の生産が積極的に行われ、檜蠟の増産と自由取引の強化が図られました。また山口県田布施町近辺のハゼノキから抽出された檜蠟は、良質であるために大阪の市場で良い評判を得ていたそうです。田布施町宿井には、現存する当時のハゼノキが「宿井のハゼノキ」として山口県の指定文化財となっています。

ところが明治以降、檜の栽培は衰退の一途をたどります。その一因として「檜まけ」（かぶれ）も挙げられるとおっしゃいました。「檜まけ」は、樹液に含まれ、漆のウル

シオールと似たラッコールに触れることで発症する「アレルギー性皮膚炎」だそうですが、非接触ながらも心因的要因に基づき、似た症状を発症する人もいるのだそうです。なおウルシ科のかぶれは耐性を獲得すること(免疫寛容)ができるのだそうです。

さて私もそうでしたが、山口県には「櫨はかぶれる」といった強い思い込みがあり、櫨を嫌っている現状があります。この状況をなんとか改めたいと、花柳寿寛福さんは考えておられます。他県の方々も不思議がられるとおっしゃいました。かつての名産地の1つであった山口県で、櫨蠟の価値を見直してほしいし、櫨文化による地域おこしを進めたいと強くお考えです。今後も、櫨文化を普及するために、各地で活躍する人たちとともに、忘れられ、嫌われてしまった櫨の豊かな循環を未来に繋ぐ活動を続けたいとしめくられました。

お話の中で全国的には、櫨による地域おこしの事例があるとおっしゃいましたので、早速、それはどこなのかと質問しました。和歌山県や久留米市、田布施町で取り組まれているとお答えくださいました。

そこで例により、インターネットで検索してみました。平成29年5月16日の記者発表資料によると、和歌山県紀美野町志賀野生活圏で、「過疎集落支援総合対策」事業として「“櫨蠟の里志賀野の”活性化プロジェクト」が取り組まれていました。農業が地域の主産業の志賀野生活圏は、米や柿、柑橘類などが栽培されている他、古くは櫨蠟の原料であるブドウハゼの原産地としても知られていたそうです。そこでブドウハゼの栽培を復活させ、地域産業の一つとして確立し、また和紙の原料をも栽培し、“志賀野和紙”の確立を目指して取り組むこととされています。

福岡県久留米市田主丸町では、江戸時代苦しむ農民たちを救うため、地元の山の中腹で松山櫨を発見し、苗木の生産に成功し、その生産に励みます。しかし時代と共に櫨産業は衰退し、松山櫨による蠟生産も絶えてしまいました。この失われた松山櫨を復活させたいとの願いから、平成19年(2007年)に「松山櫨復活委員会」(<https://mahaze.com/about/>)が発足しました。

また山口県の指定文化財「宿井のハゼノキ」があることから、田布施町において、昔通りの製法でロウソクを作って町の名物にしようと、「ハゼの実ロウ復活委員会」が平成9年(1997年)11月設立されました。この活動は、ハゼの巨木文化財として残っている田布施町で、江戸時代の手法によってハゼの実からロウを搾ることからスタートしています。活動の内容は、①近隣の山から採取したハゼの実からロウを搾り、ロウソク・ポマード・口紅等を製造、②山口サビエル記念聖堂のクリスマスミサにハゼの実ロウソクを提供、③県内外の「ハゼの木」や「ロウソク」に関係する団体との交流、④インターネットホームページでの活動のPR、⑤ロウ搾りやクレヨン作りの体験教室、⑥ハゼの木の植樹等があります。

この団体では、活動を通して、会員・参加者共に自然の恵みや先人の知恵の素晴らしさを実感し、ふるさとへの愛着を深めることができたとしています。今後も「ハゼの実ロウといえば山口・田布施」として全国に知られることを目標に、独創的な活動を継続していきたいと考えておられます。

花柳寿寛福さんには、時間の押しているため駆け足でのご説明をお願いしてしまい、誠に申し訳ありませんでした。ご協力、誠にありがとうございました。櫛文化の奥深さが少し分かったように思います。ありがとうございました。

今回も、会員の松田さんはコーヒーや生姜湯などをご準備くださいました。とてもおいしくいただきました。ありがとうございました。

発表された方をはじめ参加された皆さん、大変お疲れ様でした。ありがとうございました。

